

寄稿

「教科教育、特別支援教育、ともに授業力を高める」

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
上席総括研究員 廣瀬 由美子 氏

【寄稿】教科教育、特別支援教育、ともに授業力を高める

国立特別支援教育総合研究所 上席総括研究員 廣瀬 由美子

本事業は、「特別支援教育の視点を取り入れた新しい授業づくり」と称して、発達障害のある児童生徒にも分かる、通常の学級での授業づくりに取り組んだプロジェクト研究である。

縁あって、私もプロジェクトに参加することができたので、本稿では、プロジェクト研究の一員として、本事業の意義や成果等についてまとめてみる。

本事業の意義

通常の学級での授業づくりに、「特別支援教育の視点を取り入れる」と加えられた意図には、通級による指導の増加と担当者の専門性に関する課題や、通常の学級における授業改善の必要性があったのではないかと推測する。

何故なら、その背景には、新たな対象となったLDやADHDのある児童生徒に対して、通級による指導での十分な実績がないといった現状と、発達障害のある児童生徒を含めた通常の学級での一斉指導の在り方など、課題が山積しているからだと理解している。

そこで、本事業の目的は、通級による指導のさらなる専門性の構築と、通級による指導の効果を通常の学級の授業に生かすこと、そのための具体的な指導内容や指導方法を探ることであると考える。

これらの目的を達成するためには、通級による指導の担当者と通常の学級の担当者が、互いの役割を明確にし、それぞれの指導の場における実践の共有が重要になると思われる。このような視点を持ちながら、各担当者が日々の授業を評価し、共にブラッシュアップ^{*11}することで、通常の学級の多くの児童生徒は勿論のこと、発達障害のある児童生徒に対しても効果的に還元されるのではないだろうか。

通常の学級の授業力を高める

本事業の一環として、岩出市立中央小学校 5 年生の学級において、筑波大学附属小学校教諭、桂聖氏の模範授業見学の機会を得た。桂氏と初めて出会った児童は、授業者に臆することもなく、日頃の力を発揮しながら桂氏の授業を楽しんで受けていた。その際、桂氏の授業は、国語科の授業として様々な工夫がなされていることが散見された。

例えば桂氏は、本時のねらいに即して指導内容を焦点化したり、学習材を視覚化したりするなど、より分かりやすい工夫を行いながら、さらに児童の反応を共有化させるなどして、全ての児童が休むことなく活動できるよう、まさしく仕組んでいたという表現がぴったりの授業であった。

我々が桂氏の授業を見学していると、指導技術ばかりに注目しがちであるが、指導技術は結果であり、要は、学習指導要領を念頭においた教材研究を丹念に行った授業そのものであり、そこから生まれる様々な工夫は、工夫そのものが分かりやすさにつながり、児童にとっては、あっという間に感じられた一時間ではなかっただろうか。

一方、学級には、授業の工夫だけでは活動に参加することが難しい児童もいたと思われる。彼らに対して桂氏は、様々な活動場面で配慮を行っていた。その配慮は、通常の学級担任が実施可能な範囲であり、授業開始前に行ったゲームによる個々の児童の反応に即していたと思われる。桂氏は、授業開始前に 10 分程度の簡単なゲームを行うことで、各児童の話し方、答えの内容、声の出し方、反応の様子をアセスメ

ントしていたのである。

実態把握は、特別支援教育関係者なら入念に行うものであるが、初めて出会う授業者にとっても、事前の情報以上に必要なアセスメント※¹²であると思われる。

通常の学級の担当者は、自身の学級であるから児童生徒の実態把握は十分であろう。であるならば、教材研究に裏打ちされた教科の工夫と共に、実態把握から導き出される配慮の必要な児童の反応を予想し、予想から対応策（具体的な配慮）を考えることが、桂氏の授業に近づく質の高い授業になると考える。

通級による指導の授業力を高める

本事業の一環として実施した研究授業では、岩出市立中央小学校の宮下静香教諭に提案授業をして頂いた。2年目の若い教師であるが、提案授業もさることながら、児童一人一人の実態把握が丁寧にされているのには非常に驚いた。

その後、提案授業から発達障害のある児童においても効果的であった取組について、通常の学級の担当者と通級による指導の担当者が混在するグループで協議を深めた。この協議では、どのグループからも宮下教諭の提案授業に多くの配慮点を見つけることができた。

しかし、筆者は特別支援教育の代弁者として、さらに協議に望む点としては、通級による指導を利用している児童に対し、通級担当者として行うべき指導はどのような課題だったのか、この点も協議できれば、より本事業のテーマに迫ることが出来たのではと考えている。

通級による指導で重要なことは、それぞれの障害特性に対応し個別的な課題を軽減することと、通常の学級においてその成果を生かすことにある。そのため、通級による指導の開始時期を考慮しながら、個別的な課題の軽減に多くの時間を費やす時期と、その成果を生かすための般化指導に重点を置く時期と、児童生徒の実態に応じて相互のバランスを取りながら、個別の指導計画を作成し実施していくことが大切である。

つまり、通級による指導を利用している発達障害のある児童生徒に対し、通級による指導場面で個別的な課題を軽減する指導が、通常の学級の授業に役立っているのかという視点を持ち合わせて欲しいというのが筆者の希望である。

まとめ

最後に、本事業を進める中で「ユニバーサルデザイン」と言われる配慮が話題になったが、従来から行われてきた教科教育での工夫には、多くの児童生徒が理解し利用しやすいユニバーサルデザインといわれる内容が多々あるという事実である。

つまり、本事業の根幹は、まずは教科教育の充実であり、その上で、通級による指導の専門性がより個に即した配慮になっていくのだと考える。

なお、本事業の成功は、今後も教科教育と特別支援教育それぞれの授業がブラッシュアップされることと、それぞれの教育の本質が融合していくことにあると考えている。